Chapter 8**：スパークとスパイト**

学校生活が、ようやく――普通に感じられるようになってきた。

ブースターとシャワーズは、今やちょっとした隠れカップル。授業に一緒に向かい、ノートを交換し、机の下で不器用に尻尾をぶつけ合っていた。

二人の先生は、落ち着いた雰囲気と完璧なリボン、そしてたった一睨みで教室の騒ぎを止める不思議な力を持つ、知的で時に毒舌なシルヴァディ先生。彼女はトランス女性だった。

「恋は戦場よ」と彼女は言って、モモン茶をすすった。「でもお願いだから、もうカーペットを焦がさないでね、ブースターくん。」

だが――平和は長く続かない。

登場：サンダース。

エレクトリックタイプの孤児。荒っぽくて、いつも反省室の常連。いわゆる“クール系”を気取って、毛並みは逆立ち、目は半開き、校章のタスキもまともに付けたことがない。そんな彼の趣味？

危険とのイチャつき。そして、シャワーズへのちょっかい。

「よう、シャワーズ」とロッカーにもたれながら彼は言った。「毎回顔を赤くして部屋に火をつけるようなやつと付き合うの、飽きねぇ？」

彼女は目をぐるりと回した。「性的嫌がらせで感電死しない世界線って考えたことある？」

シルヴァディ先生は即座に彼の耳を掴んで引きずっていき、「境界と訓練キャンプについて」ぶつぶつ言っていた。

だがサンダースはやめなかった。そして、ブースターは気づいていた。

日が経つにつれ、彼らの間に走る火花は――タイプの相性だけでなく、個人的にも――増えていった。サンダースが近づくたびに、ブースターの尻尾の炎がぴくぴくと動いた。

そして、ある昼休みのことだった。サンダースは爆弾を投下した。

彼はテーブルに歩み寄ると、手紙をバンと置き、

「バトルだ。彼女をかけてな」と言った。

教室はざわめいた。シルヴァディ先生でさえ、お茶を落とした。

「彼女は賞品じゃないぞ」とブースターは唸った。

「お前のモノでもないし」とシャワーズがサンダースを睨む。「でも念のため言っとくけど、もし戦うなら、あたしはブースターを回復するから。」

サンダースはニヤリと笑った。「上等だ。明日の放課後、勝った方がデート権な。」

シルヴァディ先生はついに立ち上がった。「だ・め。ここは恋愛道場じゃありません！」

だがブースターは、サンダースを真っ直ぐに見つめていた。

「彼女をモノみたいに奪い合うつもりはない。でも、もう一度でも彼女を侮辱したら――そのスパーク、全部燃やしてやる。」

次の日、戦場が整った。

校庭の裏手、体育館のそば。サンダースがエネルギーをバチバチと放ち、ブースターは静かにリングへと歩み寄る。シャワーズは腕を組んで近くに立ち、明らかにこの状況にうんざりしていた。

「まだやるつもり？」と彼女。

ブースターは答えず、ただサンダースを見つめた。「さっさと終わらせよう。」

生徒たちが歓声を上げた。シルヴァディ先生でさえ、ノートで顔を隠し、非常用のお茶をすすりながら見守っていた。

「これはもう、情緒不安定地獄確定ね…」

戦いが始まった。サンダーボルトとかえんほうしゃが交差し、雷と炎が校庭を切り裂いた。

まさに壮絶。

…だが、それも束の間だった。

突然、大地が揺れた。低い唸りが地面の下から響き――

ドンッ！！――じしん。

サンダースもブースターも地面に叩きつけられ、苦痛の声を上げた。共通するじめんタイプの弱点が、彼らを完全に無防備にした。

「ちょっと待って、誰がじしんなんて使ってるの!?」シルヴァディ先生が叫び、リボンが大暴れ。

そのとき、体育館の壁が爆発した。

ガブリアス――筋肉モリモリでくたびれた体育教師が、半死状態のピカチュウを尻尾で引きずりながら現れた。

「てめぇこのバカネズミ！トレーニングログじゃなくて『ポークス』なんてワードで体育館のパソコン検索してるの、バレないと思ったか！？ポークスだぞ！？ポークス！！」

ピカチュウは震えながら、「アニメみたいな感じかと…でも…もっと肉っぽい…」

シャワーズは戦場に駆けつけ、目を輝かせながら巨大ななみのりを召喚。衝撃波を洗い流し、場を安定させた。

そして二人――ブースターとサンダース――を助け起こした。

「バカども…」彼女は呟いた。「あたしのために潰されかけて…原因がピカチュウの豚系検索ってどういうことよ。」

シルヴァディ先生でさえ、言葉を失っていた。「この現実、ログアウトしたいわ…」

その後：

* ガブリアスはピカチュウに三週間のスクワット地獄を課した。
* ブースターとサンダースは、短い沈黙の中に敬意を交わした。…が、サンダースがぼそっと「でも俺のほうがアツいと思うけどな」と呟いた瞬間、ブースターは笑い出した。
* シャワーズは二人に「ナンパ禁止・喧嘩禁止」の保護観察命令を下した。